

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

大学間連携イベント
「ワークショップで紛争解決を学ぼう」
実施報告書

2016年1月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国や開発途上国における平和構築と復興・開発に関する調査・研究・実践と人材育成を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業を平成 22 年度から実施しております。本報告書は、この事業の一環として 2015 年 11 月 14 日に特定非営利活動法人沖縄平和協力センター（OPAC）のご協力を得て実施した大学間連携イベント「ワークショップで紛争解決を学ぼう」の実施記録と参加者の報告書を取りまとめたものです。

当日は、OPAC 副理事長で早稲田大学教授の上杉勇司氏を講師にお招きして、お茶の水女子大学を始め 10 大学から 20 名の学生が参加しました。学生が主体的に参加するワークショップ形式で実施され、紛争解決と平和構築について、紛争とはそもそも何か、紛争を解決するためにはどのような解決策の創り出し方が存在するのか、将来紛争解決及び平和構築に携わる人に必要な心構えは何かなどについて学び考える良い機会となりました。

体験型のプログラムと円滑なファシリテーションで参加者の主体的な学びを促してくださった講師の上杉勇司様および OPAC の皆様、並びに、積極的にグループワークを進めてくださった参加者の皆様にお礼申し上げますとともに、このイベントが更なる学びや実践へとつながることを期待いたします。

2016 年 1 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター
センター長 北林 春美

目次

	ページ
1. 活動の概要	1
(1) 活動の目的	
(2) 実施日時	
(3) 実施場所	
(4) 講師	
(5) 主催	
(6) 協力	
(7) プログラム概要	
(8) 参加者	
2. 参加者報告書	5
3. 講師報告書	43
4. 資料	47

1. 活動の概要

1. 活動の概要

- (1) 活動の目的：紛争解決と平和構築について、紛争とはそもそも何か、紛争を解決するためにはどのような解決策の創り出し方が存在するのか、そのために将来的に紛争解決及び平和構築に携わる人に必要な心構えは何かなどについて、学生が主体的に参加するワークショップ形式で学ぶことを目的とする。
- (2) 実施日時：2015年11月14日（土）13:00～17:30
- (3) 実施場所：お茶の水女子大学 本館 135 室
- (4) 講師：特定非営利活動法人沖縄平和協力センター
上杉勇司氏（副理事長、早稲田大学教授）
小林綾子氏
森田浩介氏
- (5) 主催：お茶の水女子大学グローバル協力センター
- (6) 協力：特定非営利活動法人沖縄平和協力センター
- (7) プログラム概要：

各自の自己紹介後、参加者は、紛争に直面した際にどのように独創的に解決策を生み出すのかを様々なプログラムを通じて経験した。例えば、「レモンランドを巡る紛争」というケーススタディでは、Aさんは風邪をひいた息子のために、Bさんは入院しているレモン好きの母親のためにレモンを買う必要があるが、スーパーに残りのレモンが1個しか存在しない状況で、どのように解決するかという演習を行った。また、後半では、レモンを一つの国に置換えることで、異なる利害を抱えた対立勢力による国家統治を巡る紛争について疑似体験した。

表1. タイムテーブル

時間	内容
13:00-13:30	挨拶、自己紹介
13:30-14:00	腕組みゲーム
14:00-14:30	ケーススタディ（レモンランドを巡る紛争）
14:30-14:40	休憩
14:40-15:40	風船ゲーム
15:40-15:50	休憩
15:50-17:20	ロールプレイ（アフガニスタンを巡る紛争）
17:20-17:30	講評、総括

最後に行われたアフガニスタンの紛争を題材にしたロールプレイでは、各チーム内を①

アフガニスタン政府、②タリバン、③国連、④米国の担当に分けて、各々に与えられた立場を前提として交渉した。ロールプレイ後、学生によるフィードバック、講師による講評が行われた。

(8) 参加者：

お茶の水女子大学 学部生 3名 大学院生 1名

早稲田大学 学部生 5名 大学院生 1名

奈良女子大学 学部生 2名 大学院生 1名

宇都宮大学 学部生 1名

上智大学 学部生 1名

東京大学 学部生 1名

東洋英和女学院大学 学部生 1名

獨協大学 学部生 1名

一橋大学 学部生 1名

宮城学院女子大学 学部生 1名

オブザーバー参加 1名

お茶の水女子大学 (グローバル協力センター) 教員 2名

北林春美 グローバル協力センター長

青木健太 グローバル協力センター特任講師

2. 参加者報告書

イヴァイラ アレクソワ

早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科 博士前期課程 2年

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

個人レベルでどのように紛争解決できるのか学べる簡単なゲームから始まり、アフガニスタンみたいな紛争の特徴や紛争解決向けの交渉まで教えていただき、とてもいい経験になりました。普段個人レベルでの問題やグローバル問題がどのようにつながるのか考える機会はほとんどなかったのですが、このワークショップを通じて考えるようになりました。しかも、紛争の特徴、また予防対策について学生たちの理解を高めるため、先ず、個人の問題がどのように解決できるのかということについて考えさせるのがとてもいい方法だと感じました。なぜかというと、アフガニスタンみたいな国々は地理的にも宗教的にも日本から離れた地域だし、政治家でも解決できない課題だからこそ学生たちにも理解できないという考えが普及されていますが、このようなゲームを通じて、誰でも紛争の論理などが把握できるという印象を受けました。また、参加させていただいたシミュレーションの限られた時間で、アメリカ、タリバン側、アフガン政府と国連という一番大事なアクターの立場に立つことができたので、アフガニスタン紛争の特徴、またそれぞれのアクターの役割などがとても分かりやすかったです。もし NATO とか安保理事会の常任委員の役割に入ったら、もっとわかりにくくてもっと複雑になるだろうなと思い、ちょうどいい長さで、選択されたキーアクターだったといえます。

次に私は NGO で人権についてのワークショップを担当させていただいた経験を持っていますので、どのように人権について若者たちに考えさせるのかアイデアを持っていたのですが、紛争の根本や困難に触れることができるようなゲームは今まで参加したことがなかったです。だから、将来 NGO みたいな機関でこのようなイベントに取り組むようになれば、ワークショップで身に着けたスキルや生まれてきたアイデアが実践できるとおもいます。

最後に私の生活の中で研究生として客観的に分析しないといけないという現実には直面していますが、ロールプレイでは客観性ではなく熱心に立場を維持すること、説得力のある論点を述べるのが一番重要だといえます。そのうえ、説得力がなければ交渉がスムーズに続かないと感じて、交渉の困難さと大切さを実感できました。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

皆さんはとても熱心にそれぞれの主体の立場に立って、論じたテーマについて強い関心を持っていました。全体的に皆さんはお互いに理解するように努力し、妥協しやすく許しやすいタイプの方でしたが、実際のシナリオの場合、自分の利害を妥協するのはもっと複雑なプロセスだと感じました。また、交渉中皆さんの発言を聞きながら、やはり知識より説得力と自信の方が大事な強みだと思いました。

平和構築や紛争解決について考えたこと

平和構築の中では交渉、教育、紛争後の復興などが大切ですが、このワークショップを通じて主に交渉の特徴に触れることができ、とても興味深かったです。アフガニスタンでは国際社会が様々な利益をかかえているし、また国内も対立している団体の間での紛争の背景では調整の役をしている国連の立場は非常に大事ななという印象を受けました。

今後の学習や研究に向けた抱負

紛争中だけではなく、紛争後の平和解決のロールプレイがどのように開催されるのかということにも興味を持っています。

伊藤 優希

宮城学院女子大学 学芸学部国際文化学科南アジア専攻 4年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回、このワークショップに参加したことによって、私は多くのことに気付けたと思う。私は今まで紛争地帯における国連やPKO活動の様子を日本という紛争から遠いと感じる場所から見ていた。それゆえに平和構築や紛争解決するに至るためには第三者の介入が絶対的に必要なイメージがあった。しかし実際にワークショップを行うことによってそのイメージは異なるのではないかと気づいた。

第三者が活動における方針や動き方が明確化しており、紛争の当事者たちを惑わすような行動を絶対しないというなかなか実現しえないような条件が揃っているのであれば、きっと解決への手助けになるのかもしれない。

しかし、実際ワークショップで体感した結果、必ずしも第三者が客観的な視点から意見を言えていないこと、自分たちの利益・目標を到達点として考えている節があること、内部分裂をしており内輪揉めなど、第三者が介入することによってより拗れる可能性が高まる場合もあることを学び、第三者の理想と現地の人々の希望は異なるのではないかと考えることができた。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

ワークショップでは初めて会った女子大生の面々と平和とは何か、そして客観的な視点から冷静に紛争を考えることができた。

皆、初対面であったが活動していくうちに自分の意見・思っていること・どうしたらいいのか、など内に秘めていたものも話し、聞けたと思う。

他の参加学生と考えていく、活動していくうちに目標として掲げている「平和」は同じものであるはずなのにも関わらず中々一致しない場合、「平和」までのルートや考え方の面

だけでなく、同じ行動をしていたとしてもパターンに分かれ、その分かれた中でも意図することがそれぞれ違い、大変刺激を受けることが出来た。なぜ自分がそう考えなかったのか、たしかに自分はそちらを選んだが意図することは違った気がするなど、沢山のなぜ？という疑問や課題も得ることが出来た。

そしてその沢山の疑問・課題と共に、新たに自分のもつ「平和」の意味するものとあわせて考えることもできたのではないかと思う。

今回のワークショップに参加し出会えて本当によかったと感じている。

平和構築や紛争解決について考えたこと

特にロールプレイではレモン紛争、風船ゲーム、アフガニスタン紛争を題材に、タリバン勢力・アフガニスタン政府・国連に分かれて活動してみることによって自分たちが当事者のようになり視点が普段と違ったところから見る事ができたと思う。

風船ゲームの際はルールと目的をそれぞれ遂行するためにそのグループに分かれ活動した。各グループは役になりきっていた。しかし活動中に三つ気付いたことがある。

まず一つ目は、アフガニスタン紛争のロールプレイ前にも関わらず各グループ役に成りきっていたことだ。私は国連グループに属しており「仲裁しなくてはならない」と言った気持ちがあった。しかしアフガニスタン紛争のロールプレイならばともかくレモン紛争などの時はまだ気にしなくても良かったのではないかと考えられる。なぜ国連と聞いて仲裁をしなくてはならないという意識に駆られたのかは言葉のもつイメージの問題であると思った。タリバン勢力と聞くと荒っぽい・危険なイメージ、政府と聞くと正当性、国連と聞くと平和維持などそれぞれイメージが湧いてくる。私はその後のロールプレイでタリバン勢力がどのように台頭していったのか学ぶことができ、私が元々もっていたイメージとは違うことが判明した。知らないということがどれほど危険なのかも実感することができた。

二つ目は、国連でも自分たちの目的を達成しようとする事である。いくら紛争の解決などを掲げていても、そこには何かしら国連の目的もはらんでいるのではないかということ学んだ。私は風船ゲームの際、「仲裁しなくてはならない」という意識と共に「目的も達成しなくてはならない」という気持ちもあった。

そして、平和とは何なのか改めて考えた。国連や国際社会の提示する平和と現地の平和は一致しているのだろうか。押し付けの平和は長くは続かないと思うし、第三者が介入することによってまた別の価値観としての平和が入ってくることでより拗れる。現地の人々にとって真に何が良い平和なのか、そして争っている当事者たちはどこまで妥協しお互いを認められるかによって解決に近づくと感じた。

今回、平和とは何なのか、そしてそれを取り巻く環境、ロールプレイを実際にすることによって実際に体感し学ぶことができた。私は来年大学を卒業する。卒業し私は社会人として働く。しかし、私は今後も社会で起こり続ける出来事に注目し、日本に住んでいる一人としての意見・客観的な視点からの意見を大事にしたい。そして報道されていないとし

でも巻き込まれている人々が必ず存在し、その人たちの声をどう社会や周囲に伝えることができるのか考え、今後の活動に実行していきたい。ワークショップに参加することができ実りある時間を過ごすことができたと思う。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は現在、卒業論文に取り組んでいる最中である。テーマはインドにおけるヒンドゥーナショナリズムの台頭である。現在は 1990 年代と比較し、ヒンドゥーナショナリズムの強まりをあまり感じることはないと思う。しかし、ナショナリズムは民族が危機に瀕していると感じた時、瞬時に強まる。その逆もまたありうる。インドが核開発を始めたきっかけは中国への脅威を感じたからであるが、インドと対立しているパキスタンはインドの核開発に脅威を感じ同じく核開発した。アメリカや国際社会と言った第三者の介入によって現在核を用いるような紛争は印パ間に起きてはいない。私は両国が平和的な策を取り合えたら、という希望をもっている。しかし現在両国における平和の成立は第三者の介入によって得られたものであると言っても過言ではない。しかし当事国だけで両国の意向・目標・利益を述べるだけでは解決には至らない。介入する第三者は両国のパワーバランス・宗教・国民の希望と現状を考慮し、客観的な視点から話し合いの場を取り持つことなどを行っていくべきなのではないだろうかと考えた。

今回、ワークショップに参加することによって卒業論文の最終章である「今後のヒンドゥーナショナリズムの行方」に関して広く国際社会の動向・第三者としての役目などを盛り込めるのではないだろうかと考えている。

何 柳青

奈良女子大学大学院 人間文化研究科人間行動科学専攻 博士前期課程 1 年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

紛争解決についてのテーマは今回が初めてだが、意外に面白かった。最初の自己紹介の後には簡単な腕相撲ゲームであった。このゲームをすると言われた時、私はどうしてこのゲームをするのか分からなかった。1 分間以内に一番多く相手の手の甲を机につけられたら勝利と説明された。ここまでは簡単なゲームに見えるが、回数を増やすため、やられるほうが相手を倒すことを無意識に考えるわけである。私たちのチームは平和で 100 回以上できたが、ほかのチームはそうではなかった。あるチームは弱いほうがやられるばかりで、返そうと思うが、できなかった。タイムアウトの後、「僕は 1 回もできなかった」と先生が言った。それは、男であるから、力を入れてしまったことである。簡単なゲームであるが、紛争があった。すなわち、私たちの日常の生活の中に、小さな事からの紛争も多いことがわかる。腕相撲ゲーム以外には、もう一つのゲームがあった。それは風船ゲームであり、学

生たちを三つのチームに分けた。一つはアフガニスタン政府、一つはタリバン、もう一つは国連であった。チームに違う任務を渡し、私はアフガニスタン政府のチームに入り、渡された任務は、全部の風船を規定されたところに並べることであった。最後の 10 分間に、どのチームでも、任務を完成するため、相談を始めたが、自分の利益が気になって、相談は失敗であった。結局、三つのチームの任務が完成できなかった。このゲームから、紛争解決するため、一番解決すべき問題は利益の問題であることがわかった。利害の衝突があるからこそ、紛争があるのではないかと思う。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

参加する前に、私はいろいろ探したが、このテーマについては何も分からなかった。心配で行ったが、同じ机に座った学生と話して、私と同じわからない人がいて、安心であった。そして、最後のロールプレイはアフガニスタン政府、タリバン、国連とアメリカの四つの役割で、外国支援軍隊の撤退とイスラム法についての問題を解決するための模擬会議であった。学生たちはアフガニスタンのことを始めたのに、真剣にその役割の立場で考えて、意見を発表した。この模擬会議で、アフガニスタンの状況がいろいろわかった。そのほかに、政府はまだ力が弱いので、支援軍を必要とし、まだ、政府も、タリバンも、政権が欲しいので、利害が衝突したことが見えた。それは国のレベルの紛争なので、解決はとても難しいと思う。アフガニスタン軍はいつか強くなる時に、何かできると考える。

平和構築や紛争解決について考えたこと

我々の日常の生活の中に、いろんな紛争もあるかもしれない。平和はとても重要なものであると思うので、紛争を解決するために、相談が必要である。話し合ったら、相手の気持ち分かる。まだ、自分の利益が気になるのは通常なことであるが、話し合っ、相手の立場で相手の気持ちを考えたら、紛争が平和的に解決できるかもしれないと考える。

北島 千恵子

東洋英和女学院大学 人間科学部人間学科 4年

ワークショップを通して学んだこと

自分の利益や目的のためだけに動いては、一生戦争の解決というのではないと思いました。特に風船ゲームの中で、私はタリバンチームを担当しましたが、今まで日本人として戦争はしてはいけない、子供や女性など身分の弱い人ばかりが殺されていると思っていました。しかし、タリバン側から国連側や政府側を見てみると、すごく他の存在が邪魔に思え、タリバンの主張に納得することができました。ただ上辺だけで批判したり、テレビに出てくる人の主張や噂、悪い国というイメージだけで判断してはいけないと感じました。戦争に

至った背景、そしてその国は何を主張したいのか、なぜ戦争をしているのかなど自分で調べ相手を理解する努力も必要だと思いました。

二つ目は、今まで私自身、意見がない人だと思って自分の考えを作らなきゃいけないと思っていました。今回の場でも、自分の意見をはっきりさせること、それを相手に伝えること、目的をもって動くことは最終地点が見えて大切なことだと思いました。また、そういったところが戦争をしている国同士・自国内でも明確でないから、色々な所で問題をうみ戦争を大きくしているのだと感じました。なので、そういった自分の意見を言う・考えるという私の苦手なところも強化したいと思いました。しかし、ただただ自分の意見を主張するだけではなく柔軟な考えをもって周りを見るということも必要だということも学びました。

次に、戦争の解決に必要な事は、“互いに分かち合い仲良くすること”などという言葉を開いたり、本で見たこともあります。言葉で言うことは簡単だなと実感しました。世界規模になると、過去の事件 1 つをとっても理解と解釈の仕方がそれぞれの国、人によって違います。また、それに積み重なって他の事件がうまれるのを繰り返し、それを 1 つにまとめようとする事は簡単な事ではありません。それでも妥協案を出さなければならないという何とも言えない、歯痒い気持ちにもなりました。

他の学生との交流を通じて学んだこと・印象に残ったこと

様々な意見、考え方がたくさんあると実感しました。腕組みのゲームでも課題の絵を見ただけで、1人1人の解釈がこんなにも違いがある事に驚きました。そして、周りの人が与える影響というのは大きいということに気が付きました。周りの人がやっていたから私もやってしまったという意見やみんながやっていたのでという意見もあり、これが戦争に反映していると考えると怖いなと思いました。周りも人を殺しているから私もしてもいい、あの国も賛同してくれているから戦争をして封じ込める事が正しいのだと思ってしまっています。仲間は時に平和という安全な世界を生むのではなく、戦争という世界へ連れて行ってしまいう危険なものだと思いました。だからと言って、仲間が悪いという意味ではありません。様々な意見があるから異なった解釈や新しいアイデアが浮かんでいきます。それをどう上手く使って戦争という問題を解決していくかが大事だと思いました。

次に、感想の所で、押し通すだけが目標や目的の意味ではないという意見があり、風船ゲームなど目的だけを果たそうと懸命になっていました。しかし目的達成が1番ではなく、折り合いをつけるために私達や自国が出来ることを考える事が大切だと思いました。

このように、同じ年代でも様々な考えがあり、意見交換をする場所に参加する事は必要だと思いました。それと同時に、世界規模になるとなかなか意見がまとまらないという意味が納得できました。

平和構築や紛争解決について考えたこと

平和構築というのは、本当に簡単に解決されることはないを実感しました。話合っている途中でも、紛争解決など出来ないのではないかと、同じ意見にし、どの国もが賛同して紛争のない国にするのは無理なのではないかと思いました。また、私達がいくら紛争のない国にしようと思っても無意味なのではないかと考えてしまいました。しかし、最後のフィードバックの所で、上杉先生が「同じ考えを持った仲間がこれだけいるのだから、今後も仲良くして色々な友達作ってね」と仰っていました。戦争をしなければいけないと思っている人もいるけれど、紛争のない国にしようと思ったり、紛争解決について学びたいと思っている仲間がこれだけいるのだと気づきました。その瞬間に、紛争について学び、その背景を知る、そして、それについて考えられれば、少しは解決の道を導きだせるのではないかと思いました。また、仲間同士で話している時も「それぞれが、それぞれの道で紛争解決に関わったり、広まっていけばいいね」と言っている子がいて、紛争解決の問題が私達の行動ですぐに結びつかないとしても、少しでも紛争を解決したいという気持ちや理解が多くの人に広まっていけば、紛争解決への道は不可能ではないと思いました。1人ではなにも出来ませんが、そういった時に仲間の存在が大きくなり、各分野に広がり行動していけば道は開けていくように感じました。

今後の学習や研究に向けた抱負

もっと世界にある国や戦争をしている国について調べていきたいと思いました。知識がなければその国を批判することも賛同することもできないと思ったからです。自国の主張をすることは簡単ですが、相手の事を知り理解するには相当な時間・労力がかかります。それだけのことを自分自身も、戦争に関わっている国もしているのだろうかかと疑問に思いました。相手のことを知らなければ、自分の主張をするだけで終わってしまい相手との折り合いのつく話し合いが出来ません。また、自国についても知らない歴史がたくさんあると気づかされたのでそういった所も勉強していかなければと思いました。

また、日本との問題のある国についても、もっと勉強したいと思いました。ただ批判するだけでなく相互理解が深められる場所やきっかけづくりが出来ればいいなと思っています。

そして、最後に、社会にでても話し合いをする場は多くなると思います。異なった意見が出た時に、なぜ相手はそう思うのだろうかかと理解しようと思う心を忘れないようにしていきたいです。

桐葉 恵

早稲田大学 国際教養学部 1年

このワークショップに参加したきっかけは、上杉先生からのメールであった。私は先生が教えている Peace and Conflict Studies や基礎演習を大学で学んでいる。平和構築に興味を持ったのは高校生の時である。修学旅行先の長崎で、多くの戦争で傷ついたり被爆者の話を見て伺い、戦後を生きる日本人として戦争とはどういうことかをもっと知りたいと感じたのだ。そのような残酷な戦争が今尚多く存在し、多くの民間人が亡くなり、または貧困と共に暮らしている。この問題をどうにか解決する方法はないのだろうかと考え、国際関係並びに平和構築を勉強している。今回のワークショップでは、実際に平和構築をゲームで身を以て体験し、平和問題に関して関心の高い多くの学生と話し合えることが魅力だと感じ、参加した。

ワークショップを通して学んだこと

ワークショップでは、チームメンバーと共にレモン王国という仮定の国とその反対民主化勢力との折衝を重ねるゲーム、異なる指令に基づいてチームごとに風船を集めるミッションをクリアしようとするゲームなどから、知識を必要とするアフガニスタンの異なる勢力との話し合いなど、多岐にわたる体験が出来て、思った以上に多くのことを学んだ。第一に、対話することの難しさである。今までの平和構築の授業では、対話することが一番重要だという立場に立っていた。例えば、日韓関係である。日本と韓国は長い間歴史問題や領土問題、慰安婦問題など多くの問題を抱えている。この解決の道筋として、実際にお互いの国に行きお互いの住民や文化に対するステレオタイプを取り壊し、また事実に対して真摯に話し合っただけで必要があると授業の仲間と結論に至った。しかし、自分が実際にロールプレイをしてみて、話し合いの場では、つついとお互いに自分の今得ているものや既に得ている利益に固執してしまい、かつ一語一句のコメントでどんどんお互いに不信感が募り、なかなか議論が前進しないことに気づいた。私は、風船ゲームでアフガニスタン政府を担当した。その際にタリバンと頑張っただけで話し合いを通して解決しようとした。しかし、お互いにすでに持っている風船は絶対手放さないし、かつ風船ではなく人が欲しいのではないかという誤解が生まれ不信感が募り、協力すれば可能だったはずなのに、結局解決はせずどちらも欲求を満たすことができなかつた。お互いにもともと不信感を抱いていて、かつ利益が異なる場合に、議論してゆくのは非常に難しい道のりであるように感じられた。

第二に、第三者の役割についてである。風船ゲームにもアフガンの平和構築の話し合いの際に、どちらも国連という中立な立場の存在があった。平和構築の授業の際、いつも第三者の介入について完全に肯定的な目で見ていた。例えば、日中関係である。韓国と同様に、日本は中国との間に歴史問題や領土問題のような大きなわだかまりが存在している。

その解決に向けて、一つの案として第三者の介入を考えていた。日本と中国間での話し合いに、中立な立場の第三者が調査をし、また話し合いを調整することで、解決がスムーズに進むのではないかと考えていたのだ。しかし、今回のロールプレイで、第三者の介入に関して完全に肯定できるのかわからなくなった。アフガニスタンの平和構築の話し合いというように、実際の議場の中での話し合いに関しては、第三者が入ることでもうまくまとまったのではないかと感じた。しかし、風船ゲームの時のように実際に戦っている時は、自分の相手は話しているのになぜ第三者が介入するのか不思議に思ったし、第三者が自分の利益を損ねるのではないのかと思ってしまったのだ。確かに、第三者の介入は時と場合に応じて必要である。喧嘩のような小さい争いに関しても、親や先生というように、お互いの意見を聞いてくれて合わせてゆく存在があったからこそ、仲直りできたのだろう。しかし、今回のケースのように、第三者に関して不信感が増し、または中立の立場ではなく相手側に立っているのではないかと疑うようなこともあるのだと気付かされた。

第三に、同じ利益を得たいと思っている時の解決策についてである。お母さんが風邪をひいている息子のために欲しいレモン、そして娘が母のために欲しいレモンがスーパーに一つしかなかった場合どうするのかというゲームの中で、私たちは多くの解決策について話し合った。レモンを半分に割ったり、レモンで作ったものを半分で割ったり、皮と身で分けたり、緊急性がある方に差し上げるなどである。しかし、レモンが領土だったらどうなのかという問いかけに言葉を詰まらせてしまった。レモンだったからこそこういう回答ができたのだと思い知った。現在、国内には沖縄の基地問題や諸外国との領土問題、世界的にはパレスチナ問題やカシミール問題など一つの土地に対して、多くのファクターがその利益を得ようと争っている。その解決方法は単に半分に分けることや、そこでできた農作物や石油を分けること、そしてその土地を有効活用しようなところに譲歩することは、今までの歴史が示している通り難しいことを実感した。平和構築に関して今まで考えてきたことが多く覆されたワークショップだった。

他の学生との交流を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回のワークショップを通して、多くの平和構築への信念の強い学生と話し合い、かつ交流することができて非常に貴重な経験だった。様々な県や大学、専攻からきている学生と平和の話をするのは、多くの視点を与えてくれた。平和への希求は一緒でも、それぞれが自分の経験を生かした交渉をして印象深かった。同じ志を持つ仲間として、これからも共に切磋琢磨していきたい。

平和構築や紛争解決について考えたこと

平和構築・紛争解決はやはり難しいことなのだろうか。そもそも戦争がない日なんて来ることがあるのだろうか。このワークショップに参加して平和構築の難しさを身を持って感じた。もちろん、今まで考え、そして話し合っていたように、戦争の解決や戦後の復興

が上手く行くためには、和解のための話し合いや第三者の仲介は必要だろう。しかしまず初めにそれを行う前に、お互いの不信感を打ち消す何か新しい考えが必要なのではないかと考えた。今回のワークショップのゲームで失敗した点は、お互いのことを信頼できず、常に戦闘姿勢で自分の利益を守ろうとしたからなのではないのかと感じたからだ。風船ゲームもアフガニスタンの話し合いもお互いの立場と利益を意識しすぎて議論が全然前進しなかったのだ。お互いの信頼関係の上で話し合いを行ったり、同意の上で第三者の介入を認めたり、自分の利益のみに目を配らず相手との共通利益を求めてゆく中で、和解への道を模索してゆくことが大事なのではないかと感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

今後は、今回学んだことや感じたことを基盤に平和構築の方法についてもう一度考えてみたいと思う。まず、お互い相手への不信感や警戒心を取り除くにはどうしてゆくべきかを考えていきたい。国際関係や平和構築に関わらず、ビジネスやアートなど様々なものを組みあわせて、信頼醸成に必要なこと、そしてつくりかたを考えたい。また、もっと戦争の問題や身近な争いごとまで、多くの歴史や今の出来事を学びたいと思う。今までの平和構築のプロセスをミクロとマクロの視点から学び、平和構築のあるべき姿について考えていきたいと感じたのだ。今回のワークショップで得られた平和構築への希望を胸に勉学に励み、かつ多くの視点を得ていけるように様々なことに挑戦してゆきたいと思う。また、このように貴重な経験ができるイベントに積極的に参加してゆきたい。

小池 加奈恵

獨協大学 国際教養学部言語文化学科 4年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

このワークショップの参加を決めた理由として、「紛争についての理解を深める」というのが第一の理由としてあった。しかし実際には紛争についてだけではなく、国際社会に内在する諸問題への向き合い方について学ぶことができた。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今まで他大学の人々と議論する機会があまりなかったが、思っていた以上に新鮮で、自分にとって実りのあるものとなった。特に、自分が思いつかないような意見にふれることによって、視野を広げることができた。

平和構築や紛争解決について考えたこと

ワークショップを通して平和構築や紛争解決へのイメージが大きく変わった。以前は「戦

争なんて誰もしたいはずなのになんで存在するのだろう」という疑問を持っており、いかなる理由であれ、戦争の存在というものが理解できなかった。しかし、実際にロールプレイングの形で当事者になってみると、自分や自分のグループの利益を優先させてしまっていることに気が付いた。自分の大切な人が危険にさらされていたら、その人を守るために戦争という手段を選ぶかもしれない。このような可能性があると感じ、改めて紛争解決、平和構築の難しさを知った。

今後の学習や研究に向けた抱負

世界には紛争や貧困によって私達が抱けるような夢や希望を持つ機会を奪われてしまった人々がいる。私は将来、そのような人々に私達と同じだけの可能性を提供したい。紛争の当事者の気持ちを完全に理解することはできないし、全員の利益を完全にはかなえることは不可能に近い。しかし戦争や貧困のない幸せな生活を送ってきた私だからこそできることがある。全員の利益にはかなえなくても、妥協点を見出すことはできるかもしれない。

理想を語るだけで世界を変えることができるとは思わないが、今後はこのような強い気持ちを忘れずに、大学院にて紛争や貧困の研究に励もうと決意を新たにしました。また今回のワークショップを通して、日本にも他国の困っている人々にむきあっている、頼もしい学生が多くいるということにも気が付くことができ、とてもはげまされた。

全体として今回のワークショップは私の夢を実現させるための強いモチベーションにつながった。

小池 舞

上智大学 文学部史学科日本近現代史専攻 4年

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回、紛争解決や平和構築に関するイベントに初めて参加させていただいた。事前に関連する文献を数冊読んでいったことが、非常に役に立ったと思う。何事も予習が重要であるが、私の予習はあくまで第三者から見た紛争解決についてであった。今回のような「紛争当事者の気持ち」を実感することは、初めての体験であり、非常に新鮮であった。この経験が、今後の私の研究、さらには人生に、大きな影響をもたらしてくれることを、私は確信している。

今回のワークショップにおいて、最も印象に残ったのは、「風船ゲーム」である。国連・アフガニスタン政府・タリバン政権の3チームに分かれての、模擬紛争解決ゲームであった。このゲームにおいて、私はアフガニスタン政府チームに属し、チームの目的を達成するために、国連・タリバン政権チームとの交渉を行なった。

このゲームを通して、最も強く感じたことは、「譲歩」とか「思いやり」とかいったもの

は、なかなか実行に移せないものだということである。私は以前から、紛争や戦争、対立などがニュースで報道されるたびに、なぜもっとお互いのことを尊重して、解決のために協力できないのかと不思議に思っていた。一方が譲歩して、一方が利益を得ても、別の機会には、以前利益を得た方が譲歩すればプラスマイナスゼロになるだろう、そうやって相互依存でやっていけばいいじゃないか、と。しかしそれは甘い考えであった。

なぜ、私がそのような考えを持っていたのかが、今回のゲームで痛いほど理解できた。それらの紛争や戦争、対立は、私自身になんら関わりがなかったからである。その紛争が起こることで、私が命の危険にさらされることはない、その戦争があっても、私の生活に変化は起こらない、その対立が私の利益不利益を発生させることはない。それだから、私は他人事のように、あたかも理想的で最善のように甘い考えを振りかざせたのである。

最初に断っておくが、私はこのゲームに本気で参加した。アフガニスタン政府チームの一員として、である。アフガニスタン政府チームが望むことを叶えたいと思い、そのためであれば、ゲームのルール範囲内で、なんでもしようと思った。勝敗のあるゲームではなかったが、必然的にチームで対立が生まれるような構図になっていたことは、大きな要因である。チームの目的を達成させるために、自然と競争的になった。

今回のゲームにおいて、アフガニスタン政府チームは最大勢力であった。そして、我々は、国連チームとタリバン「政権」チームの思惑を薄らと理解していた。私個人は、自陣の目的が達成できていないのに、相手方の目的を達成するために協力することに対して、自陣の利益に繋がらないことから、否定的であった。また、私はアフガニスタン政府チームの一員として、タリバン「政権」チームと交渉したが、交渉以前に、タリバン「政権」チームとの交渉に疑問を感じていた。正式な政治組織ではないという先入観があったからである。武装勢力であり、混乱を起こしている危険な勢力との交渉を、なぜ対等な立場でやらねばならないのかという不満であった。(いつの間にか、現実とゲームの区別がつかなくなっていたのである) また、国連に対しても同様であった。目的を考える限り、対立はアフガニスタン政府チームとタリバン「政権」チームの二項対立のはずであった。第三者が介入してくることを、快く思わなかった。まるで、正義の味方、全能であるかのごとく、頼んでもいないのに仲裁に入ってくることに違和感を覚えたのである。

私は、交渉役として、相手方が提案してくることに疑いの目を持つようになった。お互いの目的を達成するには、3チームの協力が不可欠であることも気づいていたが、どのチームが先に目的を達成するか、3チームがお互いの目的すべてを達成するまで、裏切らない保証があるかなど、多くの不安があった。相手チームもそうであったであろう。言葉による交渉は、難しかった。結局はすべてのチームとも目的を達成できず、時間切れとなってしまった。

前述したように、私はこのゲームに、アフガニスタン政府チームの一員として、本気で臨んだ。チームを大切にしている人間として、なんとかしてチームの目的を達成させたかった。誤解しないでいただきたいのだが、私は解決に向けての努力をした。しかし、元来

私自身が、非常に闘争心が強い人間であることも要因となり、各チームの主張は対立したままであった。

私は、「今回のゲームでの私」のような人間が、狭い視野で聞く耳を持たず、紛争に介入すると、このように混乱を助長させるだけで、なにも解決できずに終わってしまうのかと、肌身をもって実感した。ゲームの最中、「譲歩」とか「思いやり」といった単語が頭に浮かんだが、一度も実行しようとは思わなかった。なぜなら、それは自陣の目的のために利益にはならなかったからである。私の「甘い考え」は、私自身実行できなかったのである。

ワークショップが終わった後、私はゲームのことを思い返して、恐ろしくなった。今回は、設定として、アフガニスタン政府チームの一員として「本気」でゲームをしたが、実際にこのような立場に立った時、私が冷静かつ協調を重視した人間でいられるのかどうか分からない人間であるということが分かったからである。そして、紛争現場には、このような人間がたくさんいるかもしれないということが分かったからである。自分が体験したからよく分かる。このような人間が他者と心から信頼し合って交渉することは難しいのである。

しかし、難しいからといって、現状のままにしておくこともできない。あらゆる学問に通じることであるが、紛争解決の分野では特に、正しい解決策や結論などはないということ、このワークショップ全体を通して実感した。そして、「風船ゲーム」を通じて、「当事者の気持ち」を少し体験できたのではないかと思う。素晴らしい体験であった。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

前述したように、このようなワークショップに参加したのは初めてだったので、この分野に興味関心を持つ同世代の学生と交流・討論するのも初めてであった。彼女たちは、たくさんの視点を持ち、客観的に物事を判断することができていた。また、紛争解決に向けて、自ら積極的に活動をしている人も多かった。人との交流によって得られるものは、非常に大きく、素晴らしいものであることを、改めて実感した。彼女たちとは、ぜひ交流を続けていきたい。

平和構築や紛争解決について考えたこと

主に歴史を学んでいる立場の人間からすると、戦後の日本は、軍事的分野において鎖国をしているようである。「軍事＝戦争」と見える風潮があるからであろうか。この状態をよしとするか否かは難しい問題であるため、ここでは取り上げないが、平和的な武力の使用というものに、もう少し視線を向けてもよいのではないかと感じた。「力には力で」が良いというわけではないが、平和構築・紛争解決には、残念なことに最低限の武力が必要なのではないかと、実感したからである。

また、私個人としては、この分野において、私が今持つ知識と技術をどのように使うことができるかを考えた。今まで私が学んできた分野(歴史と教育)とこの分野には、大きな

距離があり、何をどのように応用できるかはまだ分からない。紛争解決に直結するとは思わないが、平和構築の分野における平和維持において、役立てるのではないかと考えている。

今後の学習や研究に向けた抱負

今後は、紛争解決に関して、事前にくらか予習していったとはいえ、自分の知識の浅さ、視野の狭さを痛感したため、まずは基礎を固めたい。そして、私はやはり、教育に重点を置きたいと考えている。それをふまえ、紛争解決後の平和構築分野への理解を深めていきたい。

河野 樹里

早稲田大学 国際教養学部 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

先日のワークショップを通じて、紛争解決においての私たちが直面するであろう問題点について理解を深められたと感じています。以前、上杉先生のセミナーで似たアクティビティを体験したのですが、やはりミニゲームのような活動を通して学ぶというプロセスはひとりひとりが楽しめるとともに、体感することでよりわかりやすく理解することができると思いました。特に、3つのグループに分かれて風船で目的を言わずにミッションを行うというゲームでは、まず話し合いをするという段階にもっていくことさえも難しく感じました。お互いが本当の目的を隠しつつ、相手と交渉をすることは、妥協点を見つけるにも、相手を信じるにも判断材料が少なすぎると共に、非常にお互いが納得した上での決断を出しづらい状況でした。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

他大学の学生と初めてこのような場を通して意見交換を行い、ひとりひとりが持つ平和に対する意識をシェアすることができ、とても良い経験になりました。なぜ紛争解決に対し関心を持つようになったのか、また平和構築のビジョンなども人さまざま改めて自分自身がどういった意識をもっているのかを今一度考えさせられました。しかしながら、このようにひとりひとりが目指す最終的な目標は紛争解決による、より平和な世界であり、共通の理想像があると思います。これを基盤として皆が声を合わせ、意見を外へ発信していくことが可能であるように感じました。私は、この小さな取り組みが周囲の意識や関心を捉え、さらなる平和構築の実現に向けての第一歩になると考えています。人の気持ちや行動を動かすというのは個人の一存では到底できないものであり、安易に周りの人に呼びかけて平和に対する意識を高めてもらうというのは、あまりにも抽象的で実現が難しいこ

とです。しかしながら、今回のワークショップを通して、私はこのように同年代で同性の学生たちが、同じように紛争の解決などに対して真剣に取り組んでいることにとっても驚いたと同時に、これらの機会を通じて私たちが少しずつでも行動を起こしていくことが可能ではないのだろうかという希望を持ちました。

平和構築や紛争解決について考えたこと

ワークショップの一部であるロールプレイを交えたディスカッションのなかで、利害関係を明らかにし、議論を行った際に、いかにそれぞれの意見や要望に見合った解決策を編み出すのが難しいのかを身を以て実感しました。やはり、どちらかが譲歩する必要性を感じ、一筋縄では解決の糸口が見つからず、私自身もどかしい思いでディスカッションを進めていました。しかしながら、少しでも「相手の立場なら、自分はどう思うのだろうか？」といった考え方を持つことで、その問題に対する意識が変わってくるように思います。そして、解決においてまず大切なのは、相手の立場になって考える、という余裕と冷静さを持つことが重要であると感じました。

今後の学習や研究に向けた抱負

今後とも、紛争や現在の社会情勢、また日本と外国の国際関係に関する知識を増やしたいと強く思っています。このワークショップを通じて、改めて平和構築に対する関心や紛争解決を目指す思いが強まったと共に、自分にとってこれらが、これからもぜひ理解を深めていきたい分野であると再確認しました。自主的に、また講義やセミナーを通じて、より一層平和に対する意識を高めて、その思いを周りに発信していけるように努めていきたいと思えます。

小林 明日香

早稲田大学 国際教養学部 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回のワークショップでのアクティビティの印象としてはとても参加しやすいものだった。手を使ったゲームやレモン国についての話し合い、風船ゲームやケーススタディーなどにはとても楽しく取り組み、学ぶことができた。最初に、ワークショップでのアクティビティの内容を聞いた際は、予想していたようなものとは全く異なり、ここから紛争解決についてどのようなことが学べるのかと疑問を持った。しかし、最終的には授業で紛争解決について学べる理論とは違うことを実践的に学ぶことができた。

第一に、このワークショップでは第三者の影響力の強さを様々な場面で実感した。一番始めに取り組んだアクティビティは課題文が意図的に理解しづらくなっていたため、互

いの利益を優先するペアもいれば、そうはしなかったペアもいた。何をすればよいのかわかっていないペアもいたが、一つのペアが始めるとそれを真似するペアが多くいて、第三者の影響を受けていると感じた。また、風船ゲームの際も第三者の一言で一つのグループのまとまりが崩れ、グループ間の溝を作る原因になってしまったことがあった。このように、実際の世の中でも第三者の様子を見て自身の行動を決めたり、第三者が介入することで状況が悪化したりすることはよくあることだと思った。このように、他者の行動で、自身の次の行動を決め、それによって事態が良い悪いどちらの方向に向かうかが決まるので、誤解を招くような行動・言動は避けるなど自身の問題への取り組み方は十分考えた上で行動しなければならないと感じた。

また、今回はアフガニスタンとタリバンの問題についても考え、議論を行った。その中で、初めからアフガニスタン、タリバン、アメリカ、国連が同じ席につき、対等な立場として行ったが、よく考えると実際の世界ではこのような状況は現状のままだと有り得ないのだということに気が付いた。この他にも論点ごとに分かれて議論したが、このようにワークショップでは解決案を導きやすいような設定がしてあり、論点も絞られて少なかったにも関わらず、解決案が出ない状態のまま終わってしまった。このような状態でも中々平和構築・紛争解決にたどり着くことができないので、より多くの問題が絡み合い、複雑化している実際の世界での問題解決の難しさを知った。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回のワークショップには留学生を含め、様々な大学から学生が参加していた。日本人学生の間でももちろん意見は異なっていたが、留学生の意見は特に印象的だったのを覚えている。一つのレモンを二人が必要としているという設定のアクティビティーでは、実際に自分がその場面に遭遇したらこのような行動をするだろうなどという意見が出て、私や他の日本人学生は納得していた。しかし、留学生の一人がその場面の当事者が日本人ではなく中国人であったら全く違った行動を取っていただろうと話すのを聞いて、このような状況でも文化によって人の行動が異なることに驚いた。このような小さな問題でさえ文化の違いが行動に表れ、それによって問題の解決方法が異なってくるので、紛争解決というより大きな問題に直面した際はより濃く文化の違いも出るので、問題が複雑化し、紛争解決もより難しくなるだろうと感じた。

平和構築や紛争解決について考えたこと

今回のワークショップを通して、平和構築・紛争解決について学んだのは、人はつい自己中心的に自身の利益を一番に考えてしまうことである。三つのグループにそれぞれ異なった課題が与えられ、それをそれぞれ達成しようとする風船ゲームでは、ゲームの趣旨は互いに合意できる点を見つけ協力して、全てのグループが課題を達成という平和を目指すことで、おそらくそれは全員が始める前からわかっていたことだろう。しかし、いざ始ま

るとつい自分達の課題を達成することにしか考えが行かなくなり、多少攻撃的になったり、防護的になったりしてしまい、実際和解交渉に入ったのは終了間近になってからで、この頃には互いに不信感を抱いている状態で全く交渉は成立しなかった。この体験から、私は紛争の当事者は自分達の利益に夢中になって他のことが見えにくくなり、それが紛争を長期化している要因の一つではないかと考えた。これを避けるために、先程第三者が関わることで問題は良い悪いどちらの方向に進むこともできると述べたが、平和構築・紛争解決の際はその場に問題を両方の立場から客観的に見ることのできる第三者が必要だと強く感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

「ワークショップで紛争解決を学ぼう」には、今回のテーマである平和構築・紛争解決が、私が興味を持っている国際関係・協力・開発のどの分野にも関わる内容だと考えて、参加することにした。参加前は、堅苦しい感じのものだったらどうしようかや果たして自分が積極的に参加できるような雰囲気なのかなどとても不安だったが、結果的には半日では短いと思う程、ワークショップのアクティビティーやディスカッションなどに積極的に参加でき、平和構築・紛争解決についてより多くのことを知る良い機会になった。

元々このようなテーマについて興味があったが、実際に平和構築・紛争解決を簡単な例を用いて実践し、その難しさを肌で感じることができ、この分野についてもっと知りたいと思った。また、今まで私は、ほとんど誰もが紛争などがない平和な世の中を望んでいるはずなのに、なぜ今こんなにも紛争が存在しているのかという疑問を感じていた。しかし、確かに皆平和な世界を築きたいと考えていても、自分そして自分が属している国やグループの利益追求のためにはやむを得ない状況があり、一度問題に介入すると中々そこから抜け出せないという理想と現実との大きな差があることを今回再認識することができた。私の将来の夢は、世界に存在している様々な格差をなくすことだが、その過程では必ず対立するグループ間の問題などに直面するだろう。そのような場面に遭遇しても上手く平和な解決に向けて、対立する双方の間に橋を架けることのできるような人になりたいと思うので、今回のワークショップをきっかけにこれからも平和構築や紛争解決の理論について学びつつ、他のイベントにも実際に参加して、学んだことを実践に移しつつ、様々なことについて考えていきたい。

高田 実穂

お茶の水女子大学 文教育学部人文科学科 1年

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

私が一番印象的だったのは、風船ゲームでのやり取りだった。私たちのグループは国連の立場で、正体を明かされていない他の2グループの人たちに風船をひとつずつ持ってもらい、一つの輪をつくるというミッションを与えられた。ゲームが始まるやいなや、他の2つのグループは床にある風船を奪い合い、自分たちの陣地に隠してしまう。自分たちの目的・立場は最後まで明かさないことがルールだったため、それぞれのグループがお互いの目的を明確に理解することができないまま交渉・説得するかたちにならざるを得ず、結局どのグループもミッションをクリアすることはできなかった。ゲーム終了後、争っていた2グループから聞かれた「2者間の問題なのに、国連が介入してくる意味がわからない。自分たちの話だから、正直入ってきてほしくない」という意見や、講師からの「ミッションを達成することばかりに集中していなかったか」という投げ掛けにはハッとさせられた。今まで国連というと、世界の平和を構築するためのいわば「正義のヒーロー」のような見方でしか見ていなかった。しかし争っている2者の立場からすれば、確かに第三者である国連に口出しされる筋もなく、むしろ「正義を押し付ける邪魔者」に見えたかもしれない。私自身ゲーム中はミッションの達成のことしか頭になく、根本的な解決のために相互の立場・意見をしっかり知ろうとする努力をしなかった。ただただ、みんなで輪になってひとつになろう、という理想を押し付けるしかなかったのだ。日々生きるか死ぬかの紛争状態で生活している当事者からすれば、それは単なる現実離れした夢でしかなく、聞く耳をもともしないのも無理はないだろう。実際それぞれの立場に立ってワークショップを行うことで、常に情勢が動いていく紛争とそれに対応する国連という現在進行形で起こっている国際情勢について疑似体験をすることができた。こうしたやり取りの中で、円滑な和平交渉をするためには、まずそれぞれの立場・目的をはっきりさせ互いの妥協点を探ること、またそれぞれの文化・歴史・価値観に対する理解が非常に重要であることを学んだ。国連といった第三者は、その和平交渉において妥協点を探る手助けをすることにのみ介入すべきであり、理想の押し付けや軍事介入は情勢を悪化させるだけでしかない。今まで稚拙にも、紛争は十分な話し合いをすれば解決されるはずだと楽観的に考えていたが、それぞれが利益のために感情的になっている中で、しかも日々その情勢が変化していく中で、紛争解決が非常に難しいことであることを体感した。欲望や感情に流されない冷静さと、一歩下がって全体を客観的に見る目が非常に大切なのである。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

当日は全国から学生が集まり、お茶大学部生は私を含め2人だけだったため、そのほとんどがバックグラウンドの異なる初対面の人たちだった。学年も、専攻も人それぞれだった

たが、紛争解決や国際協力に関心のある学生が多かった。私が非常に刺激を受けたのは、他の学生の行動力と積極的に分かりやすく考えを主張する力である。風船ゲームやアフガニスタン紛争をテーマにしたロールプレイにおいて、それぞれの立場になりきり積極的に行動し発言する姿が多く見られた。私は答えが見つからない難しい問題になると、考え込んでしまいすぐに言葉が出てこないため、歯がゆい思いをした記憶がある。どの学生からも非常に的を射た感想や意見が聞かれ、私自身とてもよい刺激を受けたし、もっともっと勉強して自分の意見に自信をもって発信する力を身につけていきたいと強く感じた。

平和構築や紛争解決について考えたこと

ワークショップでの学びと重なるが、紛争を解決するためにはまず第一に、それぞれ当事者が何を目的とし、何を求めているのか、そして彼らはどういった考えで戦おうとしているのか、彼らの歩んだ歴史・文化・価値観を理解した上で明確にすることが重要である。特にロールプレイで中東問題を扱ったように、イスラム過激派のいわゆる「テロ組織」の存在感は昨今増してきている。これに対し西欧諸国は空爆で応戦しているが、はたしてそれで憎しみの芽は摘み取られるのか、いささか疑問である。タリバンが当初「世直し」を称し一つの政治集団として登場したことを考えると、彼らには彼らのなかでの「正義」を貫いているだけで、理解されないことに苦しんだ末のテロ攻撃だったのかもしれない。このように、争いを起こす当事者でもそれぞれの立場・信条があり、そこには何かしらの戦わなければならない「理由」が存在するのである。それを明確にし、一歩下がって客観的に冷静に全体を俯瞰することでなんとか妥協点を見いだせないか考えるときにこそ、国連といった国際機関の存在意義があるだろう。

また、日頃から周囲の人たちに愛をもって接することから世界平和の全てが始まることを改めて感じた。平和な日本に住む私たちがテレビで報じられる紛争に直接的に関わることはなかなか難しい。しかし、遠い国の問題でも自分の問題のように関心をもち知ろうとすること、そして身の回りから友好の輪を広げていくことが、私たちにできる平和への一歩である。また日々急速に変わる国際情勢のなかで、日本が紛争に加担しないよう私たち一人一人が政府を監視するとともに、国際政治に対する正しい知識を養っていくことが重要であると感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

昨今国際情勢はめまぐるしく変化し、特に対テロ問題では各国の緊張感が高まっている。日本もこれまででは平和な道を行ってきたが、今後どうなるかわからない。そうしたなかで、前述した通り国際政治に対する知識を養うこと、そしてあらゆる地域の歴史・文化・価値観への理解を深めることの重要性を改めて感じた。今後そういった分野について学び、世界情勢を客観的にあらゆる視点から見ていくことで、世界平和の一端を担えるような人間になりたいと思う。

中村 知恵

一橋大学 法学部国際関係コース 4年

ワークショップを通じて学んだこと

今回のワークショップでの一番の収穫は、ロールプレイを通して紛争の「当事者」を演じることで、紛争中に何が起きているのか、どのように、なぜ対立しているのか、そして外部勢力はどのような意図をもっているのかについて具体性をもって考えることができたことでした。

風船ゲームでは、以下の2点の発見がありました。まず、それぞれのチームが自分たちのチームの利益がどのようにすれば利益を最大化できるかを最優先に考えて衝突している様子が、実際に各地で起きている民族紛争と同じものだと感じました。ゲームの中で風船をどれだけ確保できるか等、それぞれの目標達成を最優先に考えて争いあうアフガニスタン政府チームとタリバンチームの様子は、土地や資源等を巡って争う紛争地の民族同士と何ら変わらないものに見られました。そして、2点目は、グループ内でコンセンサスがとれていないケースが多く、こうしたケースは実際の紛争でグループの内部分裂に他ならないのではないかとことです。当日のゲームでは、アフガニスタン政府とタリバンの交渉中に、政府側がタリバン側の風船を奪おうという動きが起きていました。実際の紛争でもこのように内部で統制がとれていない状況により、組織・グループの弱体化や敵対勢力の不信を招き、結局そのグループにとって不利な状況を作り出すものだと感じました。

最後に実施されたアフガニスタンの紛争を巡ったロールプレイで、外部勢力としての米国を演じることで、国際交渉の難しさを痛感しました。米国は9.11以降対テロ戦略を実施しており、アフガニスタン政府と密接な関係を持っているとされています。

そうした中で、ロールプレイの際にアフガニスタン政府から米国がアフガニスタン政府に求めるものとして何があるのかと聞かれた際に、実際にどこまではっきりと明示して答えるのかに悩みました。アメリカがアフガニスタン政府を支援するのは、対テロ政策により米国の安全保障を確立するためであるのは勿論ですが、戦略的に重要な地域を抑えたい、天然資源を確保したい等の背景も存在すると考えられます。しかし、国連という中立性の高いアクターとタリバンという反対勢力も同席する国際会議で、その全てを発言してしまうとかえって反発を招くのではないかと懸念も抱きました。今回の経験は、一国の国際会議での振る舞い、外交政策の難しさについて考えるよい機会となりました。

このように、ロールプレイを通じて実際のアクターの立場になり、当事者目線で考えたからこそ様々な発見が得られたワークショップでした。

他の参加学生との交流を通じての学び

本ワークショップには、大学一年生から大学院生、社会人までの多様な年代、そして専攻も理学部から言語学等様々なバックグラウンドをもつ方が参加していました。そのため、

これまで私が考えもしなかった発想を聞くことができ、柔軟な思考が可能となりました。レモンゲームでは、二人の間でレモンひとつを巡ってどう対処するのかという問いに対して、「そもそも見知らぬ人とはレモンだけを巡って話あわないのでは」という根本的な疑問を投げかけられていました。確かに、私自身よく考えてみれば、スーパーで買おうとしていたレモンが残り一つで、それを目の前で見ず知らずの人が買おうとしていた場合、そこで譲ってもらおうと交渉するというより、むしろ話しかけることなどなく諦めて別の店に行くなど妥協案を探る可能性が高いです。この経験から、レモンゲームでは、自らの思考の甘さを認識することのできる良い契機となりました。

平和構築・紛争解決について考えたこと

これまで、「紛争」というと、アフリカや中東地域等、日本から離れた場所で起こっているものというイメージでした。私自身平和構築・紛争解決について関心が強いので、これまで様々な論文を読んできましたが、「紛争当事者」の状況がどのようなものであるか、彼らがどのような心境であるのか、当事者の視点が欠けていたためあまり具体的に想像が付きませんでした。しかし、今回のワークショップでのロールプレイを通じて紛争当事者の立場になって物事を考えてみることで、それぞれの立場の人が守りたい利益や譲れないものを持ち、それらが複雑に絡みあっていることを紛争が発生していることを実感しました。また、紛争当事者それぞれが自分こそが正当だと思い行動していることも、妥協が生まれにくい状況につながっているのではないかと感じました。そして、こうした要因に加えて、それぞれの紛争地を取り巻く周辺国の影響等外的要因が絡みあい、紛争解決がさらに困難になっている場合も多いことを認識しました。

今回のワークショップを通じて、紛争当事者の視点にたって考えることで、平和構築・紛争解決について、現地の状況・課題についてより具体的なイメージをもって理解することができました。

今後の学習・研究にむけての抱負

私は今回、紛争解決について理論ではなく実践的に学びたいと考え、ワークショップに応募させて頂きましたが、その目標は十分に達成されたように感じています。

現在、私は大学の卒業論文で南スーダンの平和構築事業をテーマに執筆しています。南スーダンでは、現在 200 万人もの国内外避難民が発生しており、国内には様々な対立構図が存在しています。また、スーダンとの対立、国連や米国、中国、周辺諸国等様々な外部アクターが関わっており、状況を分析するのは容易ではありません。そうした中で、本ワークショップで得た学びを生かして、南スーダンの紛争をより深く理解できるよう努めていきたいと思います。

成田 季佳子

お茶の水女子大学 博士前期 大学院科目等履修生

はじめに、大学間連携イベント「ワークショップで紛争解決を学ぼう」を通じて、紛争を解決することの難しさ、ジレンマ、それを達成するための信頼関係を作っていくことの大切さを教えていただき、ありがとうございました。

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

私がかねてより、平和構築に興味があったため、今回のイベントに参加し、特定非営活動法人沖縄平和協力センター（OPAC）のワークショップを体験しました。その中で取り組んだ、腕組みゲームと風船ゲームを通じて紛争解決において大事だと思われることを発見しました。

まず一つ目に、紛争の火種は自分自身の中にもあるということ、腕組みゲームから感じました。私は、腕組みゲームの説明「二人組になって、制限時間内に相手の手の甲をできるだけ多く机につける」をうけたときに、直感的に『これは腕相撲だ』と思いました。そして、スタートの合図と共にグッと自分の腕に力を入れたのです。すると、思いもかけず力を入れることなく相手方がご自身の手を机に何でもつけたのです。私は驚くと同時に気が付いたのです、これは所謂相手を負かす腕相撲ではなかったということ。私は、最初の説明を聞いたときの印象で、ゲームの趣旨を自分流に理解してそれを実行しました。しかしそれは私だけの考えであり、相手にとってはまた違っていたのです。世界で起きる紛争とレベルは違うかもしれませんが、紛争の火種は自分自身が現象をどのように受け取るかによって起きるということを学びました。またこの体験を通じて、相手への配慮や信頼することの重要性や、先入観を持たずに状況を見極めることの大切さを学びました。

つぎに風船ゲームでは、自己利益に固執すればするほど、自分自身が相手を信頼できなくなるということを経験しました。日常生活において私は、「相手を信頼できないのは、相手が信頼できる行動や態度をとってくれないから（信頼できないのは相手のせい）」と思って生きてきました。しかしこの風船ゲームでは、自己利益に固執すればするほど、相手が譲歩してきたとしても、その言葉が「嘘」のように聞こえたり、「貶められる」と感じたりすることを学びました。これは相手のせいではなく、「信頼してみよう」という自分自身の気持ちの欠落が招いた結果だと思いました。

このゲームでは、3チームに分かれてそれぞれのミッションを伝えられ、相手チームにそれを伝えることなく自分たちのミッションを達成するようにと指示されました。私たちのチームは「できるだけ多くの風船を窓際に持って行くこと」と指示され、ゲームが開始されました。すると、相手の2チームもそれぞれに風船を奪いあい、無言のままに争奪戦になりました。

私はゲームの最中、どうにか自分のチームが目的を達成できるようにと思い様々な作戦

を考え、ゲームの最中、敵チームと自分自身のチームが対話に夢中になっている隙にこっそり自分のエリアに風船を隠したりしました。その行動により相手チームは益々こちらの事を信頼できなくなったように思いました。そして、ふと「私は紛争解決を学びに来ているのに、私がやっていることは自分のチームが完璧に勝利するかを目指すものだな・・・」と気が付きました。それに気が付いた時には、時すでに遅く、3チームはかなり長時間を使って話し合いをしましたが、結局時間切れでこのゲームは問題を解決することなく終わりました。自分たちのミッションの内容や相手の求めることを話し合いができれば、譲歩できたかもしれないと思えました。

しかし同時に、これが風船だから平和的解決のために譲歩できると思えるとも思いました。これが風船ではなく、家族を人質にするとか、自分が昔から住んでいる土地等が分断されるだとか、そういった問題に発展した場合、簡単に譲歩できるものではないと思いました。譲り合うとか、信頼するとか、口では簡単に言えても、いざ自分が実行する立場に立たされた時自分はどのように思い、感じる心を持っているのかを、このゲームは教えてくれたように思います。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は他の参加者の方より一まわりくらい年が離れておりますので、私が学生をしている時とくらべ、皆さんが積極的に会話に参加する姿勢に驚きました。同時に、今回のイベントには他大学、他県、そして海外の学生の方も参加していましたが、紛争解決に興味を持つ若者がいるということに対して、心強く感じました。

平和構築や紛争解決について考えたこと

私は今回のワークショップの体験を通じて感じた気づきを、周りの方に共有していくことで、紛争解決について考えていく輪を広げていきたいと感じました。

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったことの最後に書きましたが、今回のワークショップは、ワークショップ（疑似体験）であり実体験ではないにも関わらず、ゲームを通じてかなり心が動きました。ゲームとわかっていながら、相手を負かしたい、自分の方が有利な立場になりたい、相手は信用できないという気持ちになり、その気持ちが自分勝手な行動へと現れる体験しました。例えば当事者として、紛争地で常に生死に直面し、そして家族や子どもがいつ巻き込まれるかわからない状態だったなら、私はその中でも「相手をゆるし、紛争を解決しよう」と言い切れるのだろうか、そんな寛容さを持てるのだろうか、それを寛容というのだろうか等真剣に考えました。

また当事者でなく仲介者の立場に立った時も、上から和解を押し付けるのではなく、両者の要望を平等に聞き、そしてお互いが信頼を醸成できるように調整していくには、紛争に至るまでの時代背景、当事者のバックグラウンド（民族、宗教、思想を含む）知識と、こちらを相手が信頼してくれるようになるまで対話を続ける忍耐力が必要なのということ

を、今回のワークショップで学びました。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回のワークショップに参加し私は、紛争下にいる人々のことを身近に感じる体験をしました。最後に行ったアフガニスタン事例にしたロールプレイでは、参加者と話し合いをしましたが、日本で生活する『私』だと想像しえないアフガニスタンの人々の考えや気持ち、その立場になりきることで、不思議と紛争下にいる人々の気持ち（怒り、ふがいなさ、悲しみ、不安、おそれ）がダイレクトに伝わってくるような感覚を体験しました。

また、今後の学習や研究においては、『紛争』を事例としてみるのではなく、生きた人々が実際に抗っているということ念頭におき、真摯に向き合っていきたいと思います。

今回は、貴重なワークショップに参加させていただき有難うございました。

西田 莉紗

奈良女子大学 文学部言語文化学科認知言語学専攻 4年

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残った事

このワークショップを通じて、本を読む・ニュースを見るだけでは得られない「利害関係が絡み、お互いの目的等が明確でない場合に相手の立場に立って考える事の難しさ」を身を持って感じる事ができました。同時に、国連としてロールプレイングを体験する機会が多かったため、「当事者以外が問題解決のために介入する難しさ」をひしひしと感じました。特に、「風船ゲーム」では、相手の立場に立って考える・自分の利益を追求する以前に、「今何が起きているのか」ということへの理解に時間を割かれてしまい、実際に行動を起こすのが大変難しかったです。

他の参加学生との交流を通じて感じた事・印象に残ったこと

参加者それぞれが全く違うバックグラウンドを持ち、いろんな意見が出て大変興味深かったです。また、自分自身が言語学という今回のテーマとは少し離れた専門の勉強をしている事もあり、議論についていくのが大変だった部分も少しありました。

平和構築や紛争解決について考えたこと

ワークショップ等を通じて、実際の当事者的感情を疑似体験することはできましたが、まだまだ基礎的な知識が私には足りないなと痛感しました。これまで以上に紛争解決や平和構築に関連する情報にアンテナを張り、少しずつ知識を増やしていかなければと感じました。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回のワークショップ参加にあたって、「紛争問題をどのように社会に広め、正しく理解してもらうよう取り組んでいるのかを学ぶ」事を目標の一つにしていました。当日のワークショップではこの目標に沿った学びが少なかったように思います。その為、当日学んだ事を思い出しながら、この目標に関しては自主学習を進めていきたいと思っています。

野中 友貴

早稲田大学 国際教養学部 2年

ワークショップを通して学んだこと

今回のワークショップでは、様々なエクササイズを楽しみながら平和構築や紛争解決の重要性や難しさを学ぶことができ、とても貴重な体験となりました。まず、最初に行った相手の手の甲を机につけるエクササイズでは、説明の絵が腕相撲を連想させ求められていることと違うことをしてしまいそうになり、無意識の内に固定観念や思い込みの影響を受けていることに気付かされました。シンプルで一見紛争解決とは全く関係が無いように見えるエクササイズですが、与えられた情報を客観的に理解する必要性や、自分の行動が周囲の行動に影響されることを学び、また人間は「競争」という要素があった場合に勝つために冷静さを失いがちになってしまうという、現実の紛争問題にも通じることを学ぶことが出来ました。レモンランドのエクササイズでは、レモンを譲り合う、代用品を考える、半分個にするといった平和的な解決方法が挙げられましたが、自分たちが当事者ではなかったことや、対象物がレモンという比較的代用が可能なものだったことで様々な解決案を出すことができたのだと思います。仮に争いの対象物が土地や宗教が絡んだものだった場合、解決方法を考えるのは更に難しくなると感じましたが、両方の立場から解決策や妥協案を模索するのは、レモンランドの件に通じるものがあるとも感じました。また、風船を使ったエクササイズでは、参加者全員がアフガン政府、タリバン、国連といったそれぞれの役に成り切っていたことで、実際の紛争解決における交渉の難しさを少し理解することができたように思います。それぞれが、自分達の手の内を見せずに相手の目的を探りながら交渉を進めましたが、裏切られるのではないかという不安から、中々相手の妥協案を受け入れることができず、結局解決には結びつきませんでした。従って、実際に対立の当事者に成り切るこのエクササイズを通して、長年対立関係にある当事者間での円満的な紛争解決の大変さを知りました。

他の参加学生との交流を通して感じたこと

今回のワークショップではほぼ全員と初対面でしたが、様々なエクササイズを通して交流を深めることが出来ました。特に、最後のロールプレイでは参加学生の積極的な発言に

刺激を受け、アフガニスタンの現状に通じているわけではない中でも、自分達なりの話し合いが出来たと思います。ロールプレイでは妥協点を見つけることが出来たので、実際のアフガン問題でも交渉を重ねることで妥協点を見出し、早期に問題が解決して欲しいと強く思いました。

平和構築や紛争解決について考えたこと

今回行った様々なエクササイズを通して、平和構築や紛争解決における信頼性の重要性を改めて感じました。紛争解決の交渉において、相手を疑ってばかりいたり、第三者が仲介に入ろうとしても客観的な意見に耳を傾けたりすることが出来なければ、いつまでも議論は平行線を辿ってしまいますし、問題も長期化してしまいます。従って、第三者が仲介に入る場合は当事者双方の状況を理解し、それぞれの立場で物事を考えた上で妥協案を導き出す手助けをすることが、将来に禍根を残さずに紛争を解決したり平和を構築したりする上で必要不可欠だと感じました。

今後の学習に向けた抱負

紛争解決においてお互いの状況を理解するということの重要性から、歴史や紛争をもっと勉強する必要があると感じました。現在長期化している紛争問題なども、その真の原因やこれまでの経過、当事者達が本当に求めているものなどを理解することで、新たな妥協策が見えてくるかもしれません。従って、今の自分が紛争解決のために直接出来ることは限られているとは思いますが、本を読んだり関連する授業を受講したりすることで、紛争解決や平和構築の理解を深めていきたいと思ひますし、またこのような機会があれば、是非参加したいと思ひます。

服部 菜摘

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科 1年

ワークショップを通して学んだこと

ワークショップに参加するまでは、紛争解決には何か特別な専門知識が必要で、私にできることは少ないと思っていました。しかし、ファシリテーターの方からの問いかけや班での話し合いを重ねていくうちに、一番大切なことは当事者のところに寄り添えるかどうか、つまり「相手を思いやる」ことのできる想像力を発揮できるかどうかではないか、と感じました。想像力をはたらかせないと、交渉もうまくいかないし、場合によっては相手が大切にしているものを否定してしまい、歩み寄ることのできない状況をつくってしまいます。紛争解決に関する知識は、普段の大学の講義で学ぶことができますが、利害を異にする集団に分かれて実際に議論する、という経験はかけがえのないものとなりました。

他の参加学生との交流を通して感じたこと

年齢や専攻の違う学生と同じテーマについて議論したことで、多角的に問題を捉えることができました。今回、活発な議論ができたのはそれぞれが自分の意見をもっていたことに加え、ファシリテーターさんのアイスブレイクがよかったからだと思います。場の空気を和ませ、個人が意見を言える環境を作っていたからこそ、初対面の人同士なのに多くの意見が出せたのではないのでしょうか。また、今回このワークショップに参加した学生の多くが自分の将来や世の中について自分なりの考えをもっていました。そうした学生と話すことで多くの刺激を受けることができ、これからの勉強の活力となりました。

平和構築や紛争解決について考えたこと

今回、利害を異にする集団に分かれ、(共有資源の例として使用された)風船を巡り議論をしました。他の集団に自分の集団の要求を直接伝えることが禁止され、その条件のもと、自分たちの要求を実現させることが目標でしたが、全くうまくいきませんでした。私は、話が通じない相手だと思った瞬間に考えること(歩み寄ること)を放棄してしまい、冷静な議論をすることができませんでした。そして、切羽詰まった状況になればなるほど、お互いが自己利益を追求してしまい、風船程度のものでこれほどにも自己利益の放棄が困難なのだから、愛する人の命が危険さらされた場合に全体の利益を考えることは非常に難しいのだと、身をもって感じました。人間同士が争う以上、自己利益を追求することはとても自然なことで、どの地域の紛争の解決にも適用できる解決方法というのはないと考えます。だから、武力で争い、勝敗によって秩序を形成していくのではなく、互いに妥協案を提示し全体としての利益を考えていくことが、紛争解決への最善の道だと感じました。譲り合うためには相手への信頼感が不可欠なため、紛争という大きな枠組みだけではなく、日々の生活のなかでも、自分の言動が信頼に値しているかどうか振り返り、気をつけようと思いました。

今後の学習に向けた抱負

今回、最終的にはアフガニスタンの紛争を題材にしたロールプレイをしましたが、紛争の大きな原因であるイスラム教について知識がほぼなかったので、納得のいく議論ができませんでした。ニュースでイスラム国による残虐な行為がこれほどにも報じられているにもかかわらず、イスラム教についての勉強になかなか踏み出すことができなかったのは、恐怖が理解しようという気持ちよりも先行していたからだと思います。知らないから、理解できない。理解できないから怖い。怖いから、知ろうとしない。この悪循環のなかでは何も生むことができません。メディアの情報に頼るのではなく、もっと積極的に勉強していこうと思います。自分の立ち位置をはっきりさせ伝えたいことを明確にしておかないと、着地点が分からなくなってしまうので、日ごろから疑問に思ったことは納得のいくまで調べ、考え、自分の言葉で発信できる人間になろうと思います。

眞壁 希予

宇都宮大学 国際学部国際社会学科 3年

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

これまでの私の考えは、紛争や国際問題が発生した際、第三者が中立な立場で介入すれば紛争停止に繋がると考えていた。だが、風船を使ったワークショップを行った際に『タリバン』と『アフガン政府』の仲裁に入るべき『国連』が全く機能していなかった。これは、参加者の問題ではなく、そもそも『国連』にも思惑があり、『国連』が成そうとしていることは『タリバン』にも『アフガン政府』のどちらにも利益がないことが原因であると理解することができた。ワークショップでは時間内に3つのどのグループもミッションを達成することができなかつたことがまさにその理由を反映していると考えた。

実世界でも国連のような第三者組織が介入してもなかなか停戦合意に至らなかつたり、むしろ問題が複雑化してしまう流れを体感することができた。したがって、自身の利益の獲得にばかり目が行ってしまうとほかの選択肢が見えなくなってしまうたり、相手の真の目的を把握しようとするのが難しくなるため、利害対立が起こってしまうことを前提とし、その差をどう縮めていくかが大切であるのではないかと感じた。そして、そもそも争いが起こる前にいかに各国や組織が信頼関係を構築していくかが重要であるかを学ぶことができた。

他の参加学生との交流を学んだこと・印象に残ったこと

同じ大学生であるにも関わらず知識量、勉強量の差を感じ、自身がいかに勉強不足であるかを思い知らされた。私は平和構築に興味があるとはいえ、タリバンとアフガン政府との関わりについては全くの無知であったため周りに圧倒されてしまい、なかなか意見を言うことができずにもどかしさを感じた。よって、今回のワークショップに参加させていただけただけことは今後の学習への起爆剤となった。

また、参加者の中で私が参加している募金活動の関係者の方がいらっしゃり非常に驚いた。紛争解決および世界平和といった同じ志を持った人とは場所を変えたところでも巡り合えるのだと痛感した。今回は初対面の方ばかりであったが、今後もしこのようなワークショップやセミナーなどに参加した際にまた会えるのではないかと感じ、今回のご縁を大切にしていきたいと心から思えた。

今後の学習や研究に向けた抱負

上記で述べたように自身の勉強不足さを感じることができたため、今後は時事問題と向き合う時間を増やしたい。また、新聞なども日本のもののみならず英字新聞などを読みこなし、様々な視点からの見解を頭に入れ自身の意見を明確化していき、議論の際には堂々と発言できるようになりたい。

松田 梨紗子

早稲田大学 社会科学部 1年

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

最初の腕組ゲームの時、私は話し合うことなく、相手の腕を何度も打ち付けたことにより、「平和的ではない、合理的ではない」というマイノリティ側の存在になりました。他の人々が「いい人、平和的な人」という評価を受ける中、違和感を覚えました。むかむかするような、悲しくなるような、頭がぐるぐるして気分が悪くなりました。何か一方を善としもう一方を悪とする。実際に本人にそのような意思がなくても、そう判断されてしまうことがあるとあらためて認識しました。白黒ははっきりつけることの怖さというものが存在する。それを知れたことは今後の生活において強みになると確信しています。

他の参加学生との交流を通じて感じた事・印象に残ったこと

これまで、大学生活においてディスカッションを経験できていなかったのが本当に貴重な経験になりました。他の人の意見を聞き方、自分の意見の伝え方、積極的な人だけでなく消極的な人も発言できるようにすることに大切さ、自分の至らない点が明確になりました。また、同世代、同性かつ同じ興味を持った人々と知り合えたことは今後の財産になると思います。

平和構築や紛争解決について考えたこと

誰にとっての平和なのか、誰が得をする紛争の解決法なのか。ただ平和・紛争解決というポジティブの面だけではなく、それがもっと広い意味を持つと学びました。人間は自分の利益を捨てることができるのか？負けを認めることができるのか？根本的な問いが浮かび、自分の学習に活かすことができている。

今後の学習や研究に向けた抱負

世間で一般的に良いとされていることをただ評価するのではなく、その事象を疑い、批判し、認めていくことを大事にしようと思いました。それには、莫大な量の知識が必要不可欠です。今後、知識を増やしつつ、それを共有できる場に積極的に参加して成長していこうと思いました。

山本 千尋

奈良女子大学 理学部情報科学科 3 年生

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

このようなワークショップに参加するのは初めてでした。また、その日初めて会う大学も学年も違う人たちと一緒に主体的になって何かを学ぶという形式もとても新鮮で、面白かったです。体感エクササイズなど、初めは「はたしてこれが本当に紛争解決を学ぶことに繋がるのか」と不思議に思いながらしていました。しかし後で「なるほど、こういうことだったのか」と納得できましたし、自らが実際に体験し、参加者が自発的に行動や発言

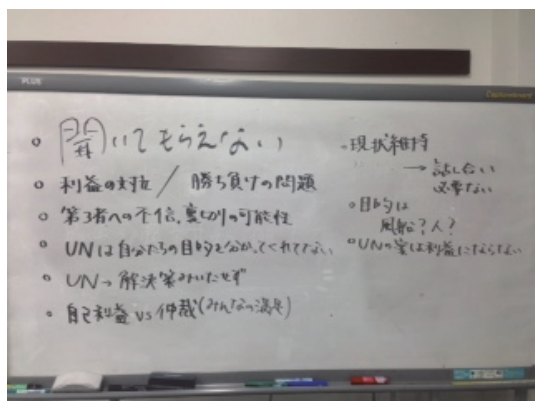


Figure 1 : ゲーム形式を取り入れたワークショップで見たこと

ができる環境で体感しながら学んでいくものなのだと、ワークショップそのものについても理解を深めることができましたと思います。

また、自己利益や第三者への不信感、裏切りの可能性のために人はこんなにも周りが見えなくなるのかと客観的に見て恐ろしくもなりました。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

正直に申しますと、自分の知識のなさを一番に感じました。他の参加者さんはこれまでに紛争解決の授業を受けたことがある人や、海外経験などを通じて主体的に学び、自分の強い意志を持って言動している人が多かったです。それは私にとってとても刺激になりましたし、印象的でした。また、いろんなバックグラウンドを持った人と交流する良い機会になりました。同じ平和構築と紛争解決に関心を持つ学生として今後も交流していきたいです。

平和構築や紛争解決について考えたこと

日本にいるだけでとても遠い存在だと思われがちですが、紛争解決のためにどのような解決策の創り出し方が存在するのか、日本にいる私たちが持つべき心構えは何かなど考えるべきこと、私たちでも頭を働かせて考えられることがたくさんあると思います。内部の難しいことまで理解するのはなかなか時間を要しますし難しいことですが、双方の立場から、または第三者としての立場からいろんな見方で考えることが大切だと思いました。どの立場でも“おもいやり”を忘れないことが最も重要だと思います。

今後の学習や研究に向けた抱負

平和構築や紛争解決について考える良い機会でしたし、これからの興味を引き出すきっかけにもなりました。今後も自ら主体的に紛争解決について学んでいきたいです。

楊 映雪

東京大学大学院 教育学研究科 生涯学習基盤経営コース 研究生

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

私にとってこのワークショップは、大変勉強になりました。一番印象に残った「紛争解決」には知識の獲得より、実践することが大切だと思います。特に、各立場の利益を模した風船ゲームから、面白くやりながら、タリバン、アフガニスタン、国連のそれぞれの利益を考え、実際に紛争解決の過程を体験することができました。ゲームの最後、紛争がうまく解決できなかったのが少し残念でしたが、その後全員が模擬国連のかたちで座って、先生から歴史背景を学びながら真剣に議論をしました。そして、「なぜ解決できなかったらう」、「相手は何を訴求しているらう」を考え始め、いろんな発想が出てきました。もちろん、タリバン問題はそのように簡単に解決できないと思いますが、このワークショップで学んだ紛争解決に必要な考え方やコミュニケーションスキルが貴重なものだと思います。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

国際協力に関心を持った方々は、コミュニケーション能力が相当高いと思います。最近、日本のニュースで気づいたことは、若者たちが海外赴任を命じられると断って、海外に行きたくないと思っている傾向があります。しかし、今回の参加者の中で、海外に留学した経験をもつ方もいますし、英語力が高く、異文化理解力も高い方が多いです。大変勉強になりました。そして、外国人の目から見て、普段はあまり見えない日本人学生さんの「個性」というものが、ここで見つけました。特にディスカッションが激しくなった時に、みなさんの思想がお互いにぶつかり合ったとしても、異なる意見を交換し、また新しい発想が出てきて、とても効率的、満足的なワークショップだと思います。そして、仲良い友たちもできて、非常に嬉しいと思います。今回このイベントに参加した方々はきっと国際的な働きに興味がある方々だと思いますが、もしかして、将来国際協力の舞台でまた出会うかもしれませんと期待しています。

平和構築や紛争解決について考えたこと

実は、その日にパリで同時多発テロが発生しました。その事件が起きた後、フェイスブックでユーザーのプロフィール写真にフランス国旗をワンクリックで重ねるという機能がつけ加えられました。私もすぐ自分の写真に「トリコトール」の色をつけて、ラインでパリ

にいる友達の安全を確認しました。もちろん、この機能に反対する声もありますが、「パリ市民の安全と平和を願う」という気持ちを全世界に伝えられると、SNS でもいい手段ではないかと思います。正直言えば、今の自分はこれしかできないです。

今回のワークショップを通じて平和構築について改めて考えました。実際風船ゲームをする時、タリバン役だった私たちのグループはいつの間にか夢中になっていて、自分の利益を守ろうという考えしかできなくなりました。相手の話を聞いても、お互いに信頼していない関係で話しもなかなか進まなく、結果紛争がうまく解決できなくなりました。世界中で起きた紛争・戦争はよく「文明の衝突」といわれています。もちろん、民族や宗教が異なる人々がお互いに理解できないと衝突が起きやすいです。しかし、今回は模擬したゲームですが、日本語だけ使っているのに、ただ「自分の風船を守る」のミッションだけですぐ激しい「戦い」になったのが、簡単に「文明の衝突」とは言えないかもしれません。知識不足なので深い原因がまだわかりませんが、これから探していきたいと思います。

今後の学習や研究に向けた抱負

ワークショップの後、私はアメリカのPBSが作った「ISIS in Afghanistan」というドキュメントを見ました。世界で初めてのジャーナリストが現地に入って、命をかけて「ISIS」の実態を調べました。その中に一番印象残ったのは、この「イスラム国」には、若い子供たちを洗脳し、人を殺すことを3歳から教えている実態です。彼らが言った「教育」は教育ではない。「学校」も学校ではない。それが「キリングマシーン」を作る恐ろしい場所です。これを見たら、やはりどんな時代でも教育が非常に重要だと思います。私は今教育学について勉強していて、将来研究者を目指しているかもしれませんが、象牙の塔に閉じこもって、現実の世相を知らないまま、いわゆる机上の空論である姿で研究者にはなれないし、社会問題も解決できないと思います。そのため、私は今回学んだことを参考にして、共生できる環境を作るにはどのような教育支援が必要なのかをこれから研究したいと思います。

李孝てい (LI XIAOTING)

お茶の水女子大学大学院 人間文化創生科学研究科 人間発達科学専攻
心理学コース1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回のワークショップに参加して、私はどんなに自分の意思を人に伝えるのが下手なのかは分かりました。国連役を演じていましたが、風船のゲームでも、最後のロールプレイの中でも、自分の中ではいろいろ考えました。例えば、風船ゲームの時、国連側は持っている風船をほかの二つのグループにあげるとして、その代わりに相手の利益に支障が出な

い限り、こちらの要求を聞いてくれると思いました。しかし、まずは国連グループ内のメンバーに相談もせず、一人でほかのグループのメンバーと交渉を始めてしまいました。そうしたら、国連グループ内で意見が統一できず、それぞれ交渉をすることになりました。結局大事な時間を無駄にした上、ほかのタリバンとアフガニスタン政府グループの一部のメンバーに疑われました。

そこで考えたのは、まず、人はどんなに素晴らしいアイデアを持っていても、ほかの人に伝えることができなかつたら、何の役にもならないと、改めて考えました。そして、いったんそれを伝えることができたら、周りの人から自分に対するイメージも変わるし、それによって実際に何かが起こるかもしれません。世界を変えるためには、単に自分の中で考え込んでいるだけで終わりではなく、ちゃんと自分の考えていることを口に出して、そこから自分が修正されたり、あるいは世界が変わったりすることになります。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回のワークショップに参加した皆さんから、特に日本人の方について、今までとかなり違う印象を受けました。私の日本人に対するステレオタイプかもしれませんが、自分の中でいろいろ素晴らしい考えを持っているとしても、容易にそれらのことを口に出して、ほかの人にアピールしたり、人と一つのことについて議論したりすることは少ないイメージがありました。いわゆる、ほかの国の人と比べると、あまり自己表現が得意なほうではないようです。しかし、今回のワークショップを通じて、自分が持っているこの偏見は一切なくなりました。

特に印象深かったのは、アフガニスタン政府役を演じる方達です。従来、ニュースなどから受けた印象として、アフガニスタン政府は、ひたすらアメリカの力を頼りにして、特に自ら国を変えて、前に進んでいこうとする意志が強くないのではないかという感じでした。しかし、最後のロールプレイの中で、アフガニスタン政府を演じる方達は、アメリカ政府側に、「私たちは国を救おうとして、……をしなければいけないです。しかし、その際に、アメリカとして、どこまで支援してくれるか、具体的にどのようなことをしてくれるかは分かりません。それについて、具体的に説明してほしいです。」といった意志を何度も強く強調し、アメリカ政府を責めていました。この時は、日本人どころか、彼らが演じるアフガニスタン政府まで、魅力的に感じさせていただきました。

平和構築や紛争解決について考えたこと

集団として平和構築や紛争解決を行うことは、一人で小説を読んだり、料理をしたり、一人でやるようなことではない。ちゃんと同じ集団の中で、それぞれの考えを話し合っ、意見を統一してから、行動に入ることです。そうしないと、効率が悪い一方、まったく逆な方向で進んでしまう可能性もあります。

特に、紛争に取り組んでいるいくつかの責任者を同じ場に呼び出し、お互いの事情や要

求を話し合う機会を作ってあげたのは何よりも大事だと思いました。こういった講義を体験してみると、自分が自分の立場に束縛されてしまい、完全に客観的な視点から物事を見ることもできないし、相手の意図を完全に誤解してしまう可能性もあります。こういったことは、討論の中でだんだん明確にされてきました。しかし、現実の中では、アメリカ政府、アフガニスタン政府とタリバンは本当に同じ場で座り、お互いの事情を話し合うことができるのでしょうか。それぞれ、子供やお母さんのために、たった一つのレモンを手に入れるための母親と娘としての二人は、本当にスーパーで初対面の相手に自分の深刻な事情を打ち上げたり、相手のことを聞いてあげたりするのでしょうか。すべてを理想の中で想像しているだけだと、現実の問題解決にどのくらい役立つのかは少し疑問に思いました。

今後の学習や研究に向けた抱負

今後、自分の学習や研究を行う際にも、今回得られた知識を使うことができたらと考えております。まず、自分はよくゼミなどで、ほかの方の研究や発表を聞いて、何か考えていますが、それをちゃんと口に出してほかの人にシェアしたり、確認したりすることはできません。理由は自分もよく分かりません。最初は、自分の言語力に自信を持っていませんでした。そして、専門知識が足りないとずっと思っていて、自分が気づいたことなら、ほかの人もとっくに分かったでしょう。それらを考えているうちに時間がたっしまい、結局何も言えませんでした。しかし、このワークショップの後、少しずつ変えようと思って、だんだん意見を言うようにしています。一回先輩の発表に感想を言いましたが、それを聞いて私が誤解したことが指摘されました。最初は恥ずかしかったですが、よく考えるとこれこそ自分の勉強になることがわかりました。

牛田 真由（オブザーバー参加）

ワークショップを通じて学んだこと・印象に残ったこと

今まで、どうして紛争が起きるのか、なぜ話し合いで解決できないのかと、疑問に思ってきた。仏教では、人類はどのような人でも平和を願う心が必ずあると教えてくれている。私はその言葉通り、人の心次第で平和は訪れると信じている。自分が、自分の心をコントロールさえできれば、紛争がいかにも自らを破滅に落とし込む無駄なものであるか分かるはずだと信じてきた。しかし、今回のワークショップを通し、紛争は「考えたらダメなことだと分かるもの」という認識ではなくなった。紛争は起こそうとして起きているのではないことを学んだ。

人は必ずどこかのグループに属し、そこにある行動規範で、自らの「正義」を決めている。自らが思う正しいことをしていくこと、そして、そのグループの規範にのっとって周りとの意見を合わせる。これらの行為が、そのグループの「こだわり」となり、こだわ

りのぶつかり合いが紛争を形作ることに気づかせてもらった。

他の参加学生との交流を通じて感じたこと・印象に残ったこと

ただただ、驚きの連続だった。大学生の、興味・関心のある分野を貪欲に追及していく姿に学ばせてもらった。自分が大学生の頃は、あんな風に興味を持ったことに果敢に挑戦していく勇氣は少なかった。やはり、興味・関心のあることには、怖がらずに、積極的にそれが学べる場所に顔を出すことが必要であると思った。

また、レモン教のグループワークを行う中で、ある学生からふと、「宗教って聞くと、それだけで漠然と怖いという思いになる。」という言葉聞いた。宗教団体に働く者として、何とも言えない気持ちになった。しかし、この学生の言葉を真摯に受け止め、人々の宗教団体に対する「怖さ」を払拭できるような自分でありたいと思った。

平和構築や紛争解決について考えたこと

平和構築や紛争解決というと、規模がとても大きい言葉に感じられる。しかし、今回学んだように、争いは起こそうと思って起こすのではなく、自然とそのような流れが形作られるものだという風に考えると、日々、自分がどう振る舞っていくかという小さいことの積み重ねが、最も根本的で、最も重要なことであると感じた。

今回、今まで「悪」だと決めつけてきたタリバンに自分になるという初めての経験をした。風船ゲームの際、私は私の役割を告げられ、「何があっても、それを達成するように。」という任務を与えられた。そして、任務達成のために、制限時間が課せられた。その言葉と時間を厳守しようとするほど、周りは、ただの敵にしか見えなくなり、周りの言うことに耳を傾けようとするこさえ出来なくなった。普段の自分の生活でも、「相手の立場に立って物事を考えること」が、できなくなる場面は多い。その時に、自分の心をコントロールし、まずは自分から、相手の言うことに耳を傾けられる自分でありたい。

今後の学習や研究に向けた抱負

まず、いろんな宗教の教義や歴史を、もう一度学び直し、自分の言葉で説明できるようになりたいと思った。今回、レモン教が題材になったり、タリバンの役をしたりして、改めて宗教の持つ危険性を知った。しかし彼らは過激思想なだけで、「宗教の持つ本質は違う。」と頭で思ってもうまく言葉に出して伝えることはできなかった。

もう一つ、「開発」という言葉について、深く学びたい。今回のワークショップで、開発という言葉に、人々はどれほど振り回されてきたのだろう、と考え込んでしまった。元々仏教では、開発を「かいほつ」と読むのではなく、「かいほつ」と読む。現在では、「かいほつ」の呼び方の方が主流となり、それは、経済的発展とセットで考えられることが多い。しかし、「かいほつ」は、心を豊かにしていくことを指し、それが他を救う原動力になり、優しさの輪が広がっていくイメージで使われる。心身の豊かさから、いつの間にか、物質

的な豊かさに焦点を当てる言葉として日本人に認識されるようになっていったのだった。
その過程を学びたい。

3. 講師報告書

研修報告書

1. 研修対象： お茶の水女子大学グローバル協力センター大学間連携イベント
2. 研修項目： 「ワークショップで紛争解決を学ぼう」
3. 研修期間： 2015年11月14日（土）13：00～17：30
4. 研修講師： 上杉勇司
5. 研修開催場所： お茶の水女子大学 大学本館 135 室

研修概要（実施方法等）

紛争解決を体感型エクササイズを通じて学ぶワークショップを実施した。研修は予定通り実施した（21名出席、1名欠席）。当初計画したメニューは全て実施できた（自己紹介、腕組みゲーム、レモンランド紛争、風船ゲーム、アフガン交渉に関するロールプレイ）。アフガニスタンをストーリーラインとしつつ、協力と対立のフレーミング、交渉、仲裁、紛争激化の過程を学ぶことができた。ファシリテーターが全体管理を担うなか、2名の補佐が班活動において適宜ファシリテートを実施した。お茶の水女子大学グローバル協力センターの北林先生と青木先生にもお手伝いいただくことで、スムーズなワークショップ運営が可能になった。

所感

お茶の水女子大学グローバル協力センターの青木先生に事前準備を周到にさせていただいたおかげで、当日は困ることがなくワークショップ運営に専念できた。体感型エクササイズは、その後のディスカッションを促す意味で効果的であったと再認識した。通常の間よりも短い尺で実施したこともあり、普段のように参加者の意見を引き出すというよりは、ファシリテーターの側からコメントをする場面が多かった。全体の時間をもう少し確保できれば、振り返りにももう少し時間をかけるとともに、的確な質問を投げかけることができたと思う。後半には、参加者は積極的に意見を述べたり、ロールプレイの役割を演じたりすることができていた。前半から、参加者の積極性を引き出す工夫が必要であったかもしれない。時間が押していたため、小道具（ポストイットやフリップチャート）を用いてブレストをする時間を十分に設けることができなかった。そのため、積極的な参加者の発言が取り入れられ、消極的な参加者の意見を汲み取るプロセスを提供することができなかった。以上のような反省点はあったものの、学びの時間としては、一方的な講義ではなく参加型で進めることができ、休憩時間などを活用して参加者同士が交流する機会も十分に作ることもできたと考える。気づきのきっかけとネットワーキングのきっかけを提供することはできた。また、参加者をはじめ、ファシリテーターの側も楽しんで半日を過ごすことができた。女子学生が参加者であったので、美味しいお菓子は、休憩時間の話を弾ませるのに効果的であった。

4. 資料

(1) 参加者アンケート集計結果

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

「本イベントを知った経緯」としては、指導教員や知人の紹介、ポスター・チラシの掲示物の方法で周知された参加者が全体の8割で、その他大学のホームページやメーリングリスト等の方法で周知されたことがわかる。

「時期と期間」は21人中18人が満足、2人がやや満足、1人がやや不満足であったが、ディスカッションの時間が短かったことへのコメントがあった。

「テーマの選択」については19人が満足、2名がやや満足、「説明のわかり易さ」については16人が満足、4人がやや満足、1人がやや不満足で、講師に対してというより自分の勉強不足とのコメントがあり、本イベントを通じて今後の学びにつなげてゆきたいとのコメントも寄せられている。「内容全般について」は20人が満足、1人がやや満足で、今回のテーマへの関心度の高さと、テーマについての関心が深められたことが窺える。

記述部分については、「簡単なゲームだけど意外に平和な問題解決につながっているものが多かった。」「客観的な視点として既存のイメージを取っ払い自分で調べてみることの大切さに気づきました。」「色々な立場から紛争を考えることができとても勉強になりました。」「紛争解決という大きすぎるテーマを身近に感じることができ新たな発見の連続でした。」など、身近なところにおいても紛争当事者の心情を学ぶことができることへの気づきがあったことがわかる。このことから、今後の学びにつなげることができたと考えられる。

本イベントを何で知りましたか（複数回答可）	計
ポスター／チラシ等の掲示	8
大学ホームページ、Facebook、Twitter、OchaMail	3
「共に生きる」スタディグループメーリングリスト	1
指導教員の紹介	8
その他（外部団体メーリングリスト（国連フォーラム、JICA パートナー）、知人の紹介）	6

本イベントの感想（時期と期間）	計
満足／適当	18
やや適当／適当	2
やや不満足／不適当	1
不満足／適当でない	0

本イベントの感想（会場）	計
満足／適当	20
やや適当／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／適当でない	0

本イベントの感想（テーマの選択）	計
満足／適当	19
やや適当／適当	2
やや不満足／不適當	0
不満足／適当でない	0

本イベントの感想（説明のわかり易さ）	計
満足／適当	16
やや適当／適当	4
やや不満足／不適當	1
不満足／適当でない	0

本イベントの感想（内容全般について）	計
満足／適当	20
やや適当／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／適当でない	0

その他（感想・提案）
<p>4年生で参加しても良いのだろうかと思いましたが、参加してみても安心して満足しました。女性だけということもありとても参加し易かったです。今回、「ワークショップで紛争解決をしよう」に参加できたことによって今まで見えなかった視点から考えるきっかけと気づき、そして志を同じくする友人を得られたと思います。それは客観的な視点、そして既存のイメージを取っ払い自分で調べてみることの大事さに気づきました。そして参加者の他大のみなさんとも知り合い、意見を交換でき大変充実した時間を過ごすことが出来ました。同じ女子学生であり、平和を願いながらもこんなにも意見の違いが出るのか、と</p>

<p>も驚きましたし、気づけなかった方法に気づかせてもらい、今後の自分に大きな課題ができた半日でした。長いようで短い半日は開始時刻まで緊張していましたが、リラックスして参加することができとても実りある時間になりました。</p>
<p>紛争国に普段支援活動をしておりますが、今日は"正義"について考えさせられました。良い問題テーマを与えて頂き有難うございます。</p>
<p>簡単なゲームだけど意外に平和な問題を解決につながっているものが多かった。因みに、利益というのは問題になるものだと思う。個人の利益や国家の利益など各自で守りたいので平和的に問題を解決するのが難しいと思った。</p>
<p>様々な考え方をみんな一緒に考えることが楽しかったです。</p>
<p>様々なことを話せて非常に貴重な経験でした。すごく面白かったです。これからの授業に活かしていきたいと思います。</p>
<p>紛争解決に向けての案を見いだすことの難しさを実感しました。</p>
<p>様々な意見が聞けて非常に興味深かった。今まで紛争というと"話し合いが大切"だとか単純に考えていましたが、様々な立場によってそれぞれの正義があり、現実には譲り合って妥協することが難しいことを実感しました。</p>
<p>大学の授業や論文では分からない部分、例えば当事者の心情をロールプレイを通して学べたことが非常に勉強になった。</p>
<p>体験を通して自分の内面をみつめ相手のことを考えることをしました。</p>
<p>色々な立場から紛争を考えることができとても勉強になりました。交渉の難しさも痛感しましたが、自分の意見を主張すると同時に相手のことも考える重要さも学びました。</p>
<p>色々な方々のお話を聞いて勉強になりました。</p>
<p>紛争解決という大きすぎるテーマを身近に感じることができ新たな発見の連続でした。</p>
<p>周りは文系の子が多く、正直よくわからない単語も飛び交っていましたが。しかし、いろんな大学、いろんな背景を持った人たちと交流する良い機会でした。内容についてもこれからもっと理解を深めたいです。</p>
<p>交渉の際、自分が強さや要求しか言わず、自分に出来ないことやそこから得られる利益をはっきり言えませんでした。そのせいで、支援などを得られず、コミュニケーションが取れなかったことに気づきました。</p>

(2) 写真



講師の上杉勇司氏



ワークショップの様子 1



ワークショップの様子 2

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「ワークショップで紛争解決を学ぼう」実施報告書

2016年1月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel/Fax: 03-5978-5546

Email: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

